

自己受容と看護学生の特性の関係 当校学生の自己評価を通して

森 恭子 山下みちえ 松崎 和代 矢本真知江
兵庫 洋子 武市 松子 岡田 政子

小松島赤十字看護専門学校

The Relationship Self-acceptance and The Special Characteristics of Nursing Students Based on The Self-Evaluation of Our Schools Students

Kyouko MORI, Michie YAMASITA, Kazuyo MATUZAKI, Machie YAMOTO,
Youko HYOUGO, Syouko TAKEICHI, Masako OKADA

Komatushima Red Cross Nursing School

要 旨

当校看護学生の自己受容と学生の特性について、学生の自己評価を通して実態を知り、自己受容と学生の特性の関係を明らかにすることを目的に、当校学生96名を対象にアンケート調査を行った。その結果は以下の通りである。

1. 当校看護学生の自己受容は沢崎の調査した一般女子大学生よりも高い。自己受容の高い学生が49% (47名)、自己受容の低い学生が51% (49名) であった。
2. 看護学生として特性が多いと評価している学生が52% (50名)、特性が少ないと評価している学生が48% (46名) であった。
3. 自己受容と学生の特性は χ^2 検定の結果関係があった。

キーワード：自己受容、学生の特性、自己評価

はじめに

看護教育においては、専門職業人として必要な知識・技術の習得と同時に、人格形成も大きな教育上の課題である。梶田は¹⁾「自分自身に対して否定的な感情を持っている人は、他者に対しても否定的な感情を持っており、自分自身への感情が肯定的な方向へ変化していくと、他者への態度も肯定的になっていく」と述べている。したがって看護者は、他者を肯定的に捉える為に、まず自己受容していることが必要である。今まで、看護学生の自尊感情についての調査はみられるが、看護学生の自己受容についての調査は少ない。また、佐

藤ら²⁾は「人格形成をする為に自己を客観的に評価する力をもっていることが重要である」と述べている。そこで、今回当校の学生の自己受容と当校教師の望む看護学生の特性について、学生自身の自己評価を通して調査し、考察したので報告する。

《用語の操作上の定義》

自己受容：ありのままの自分をそのまま受け入れる

特性：看護学生が身につけていることが期待される特別の性質

目 的

1. 当校看護学生の自己受容の実態を明らかにする。
2. 当校教師の望む学生の特性について、学生の自己評価を通して実態を明らかにする。
3. 自己受容と自己評価における学生の特性の関係を明らかにする。

方 法

1. 調査対象：対象は、本校1学年から3学年までの全学生96名である。
2. 調査時期：平成7年6月
3. 調査方法：自己受容と学生の特性について質問紙法によるアンケート調査を行った。
4. 回収率・有効回答率：100%

5. 調査内容、分析方法：自己受容は、沢崎が独自に作成した新しい自己受容測定のための質問紙^{6・7)}を用いた。項目数は全部で37あり、各項目は5領域の1つに該当するようになっている。

身体的自己(8項目)：主として身体面や外見に関わるもの

精神的自己(15項目)：主としてパーソナリティに関わるもの

社会的自己(7項目)：主として社会生活に関わるもの

役割的自己(5項目)：主として自己の役割に関わるもの

全体的自己(2項目)：自己の全体像に関わるもの

なお、役割的自己のうち、「夫または妻としての自分」「父親または母親としての自分」の2項目は該当者がいなかったため分析から除外し、分析の対象は35項目とした。

回答は5件法とし、「それでまったくよい、そのままでよい」(積極的受容)を5とし、次に「それでまあまあよい、それでかまわない」(消極的受容)を4、「どちらでもない、わからない」を3、「それではいやだ、少し気になる」(消極的拒否)を2、「それではまったくいやだ、気に入らない」(積極的拒否)を1とした。そして各項目

ごとに自分にあてはまるものを1つ選択させた。自己受容尺度は、回答の選択肢をそのまま得点化し積極的受容を5、消極的受容を4、不明を3、消極的拒否を2、積極的拒否を1として、各領域及び全項目の合計得点を求めた。この得点が高いことが自己受容が高いことを意味する。

もうひとつの質問紙である学生の特性については、21世紀の期待される看護職者のための教育のひとつの視点である自己教育力の育成や赤十字看護教育目的・目標を踏まえて、当校教師の望む学生の特性30項目を作成し、回答は2件法とした。

「ある」を1、「ない」を0として得点化した。自己受容は平均点を中心として高い群と低い群に、特性についても特性が多いと自己評価している群と少ないと自己評価している群とに分けた。自己受容の平均値の検定にはt検定、自己受容と学生の自己評価による特性の関係は、 χ^2 検定を行った。

結 果

1. 学生の自己受容について

自己受容の35項目それぞれについて、平均得点を求め、沢崎の調査した一般女子大学生(以下一般女子大学生とする。)と比較し、差を検定したところ、表1のような結果となった。これを見ると明らかなように35項目中16項目に有意な差がみられている。しかもこの16項目すべてについて当校学生の得点が高い。この16項目を領域別にみると、身体的自己が8項目中3項目、精神的自己が15項目中7項目、社会的自己が7項目中1項目、役割的自己が3項目中3項目、全体的自己が2項目中2項目となり、割合から言えば一般女子大学生より、精神的自己、役割的自己などで受容度が高い。自己受容の5つの領域の各得点と35項目全体の得点を求めて、一般女子大学生とその差をt検定したところ表2のような結果となった。身体的自己、精神的自己、社会的自己については有意差がみられず、役割的自己、全体的自己及び合計得点においては、いずれも当校学生の方が一般女子大学生に比べて1%水準で有意に高い得点を示している。

次に当校の学生のみにおいてみると、本校学生全体の自己受容の平均点は118.26であり、1学

表1 各項目ごとの平均得点の比較

項 目	一般女子大生		当校看護学生	有意水準
1 年 齢	3.98 (1.09)		3.96 (1.16)	n.s..
2 性 別	3.87 (1.23)	<	4.30 (0.93)	**.
3 体 力	3.09 (1.11)		3.29 (1.26)	n.s.
4 健康状態	3.51 (1.14)		3.49 (1.24)	n.s.
5 顔 立 ち	2.62 (0.99)		2.80 (1.16)	n.s.
6 体 つ き	2.04 (0.89)	<	2.27 (1.24)	*
7 知 性	2.38 (0.91)		2.30 (1.06)	n.s.
8 運動能力	2.64 (1.02)	<	3.11 (1.27)	**
9 服 装	3.12 (0.83)	<	3.48 (0.91)	**
10 職 業	3.87 (1.12)		3.70 (1.16)	n.s.
11 経済状態	3.06 (1.15)		3.10 (1.14)	n.s.
12 性的能力	2.72 (0.83)		2.86 (1.04)	n.s.
13 家 族	3.97 (1.06)		4.21 (1.14)	n.s.
14 住 居	3.60 (1.12)		3.71 (1.38)	n.s.
15 人間関係	3.26 (1.06)		3.45 (1.22)	n.s.
16 生 き 方	3.03 (1.09)	<	3.42 (1.11)	**
17 社会的地位	3.27 (0.91)		3.38 (1.02)	n.s.
18 やさしさ	3.29 (0.87)	<	3.68 (0.97)	**
19 まじめさ	3.43 (0.91)		3.54 (1.08)	n.s.
20 明 る さ	3.53 (0.96)	<	3.94 (1.01)	**
21 積 極 性	2.87 (1.11)		2.94 (1.08)	n.s.
22 協 調 性	3.27 (1.00)	<	3.65 (1.02)	**
23 情緒安定度	3.00 (1.13)		3.20 (1.05)	n.s.
24 忍 耐 力	3.22 (1.13)		3.42 (1.10)	n.s.
25 指 導 力	2.70 (1.02)		2.52 (1.08)	n.s.
26 のんきさ	3.51 (1.01)		3.24 (1.17)	n.s.
27 決 断 力	2.76 (1.10)		2.85 (1.19)	n.s.
28 思いやり	3.31 (0.91)	<	3.84 (0.87)	**
29 責 任 感	3.35 (0.98)	<	3.76 (1.06)	**
30 や る 気	3.08 (1.05)	<	3.42 (1.07)	*
31 男(女)としての自分	2.95 (1.02)	<	3.66 (1.11)	**
32 子供としての自分	2.99 (1.02)	<	3.50 (1.15)	**
33 兄弟の一員としての自分	3.23 (0.93)	<	3.75 (1.14)	**
34 過去の自分	2.74 (1.11)	<	3.15 (1.27)	**
35 現在の自分	2.92 (1.01)	<	3.39 (1.21)	**

*p<.05 **p<.01 () 内の数値はSDである。

表2 自己受容の各領域ごとの得点差

領 域	一般女子大生	当校看護学生	有意水準
身体的自己	24.40 (4.75)	26.09 (9.30)	n.s.
精神的自己	46.74 (8.74)	49.71(15.92)	n.s.
社会的自己	24.12 (4.41)	25.02 (7.97)	n.s.
役割的自己	9.17 (2.30)	10.91 (3.40)	**
全体的自己	5.65 (1.70)	6.53 (2.49)	**
合計得点	109.75(16.78)	118.26(20.65)	**

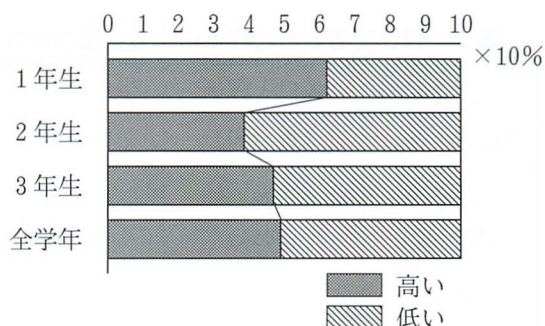


図1 当校看護学生の自己受容

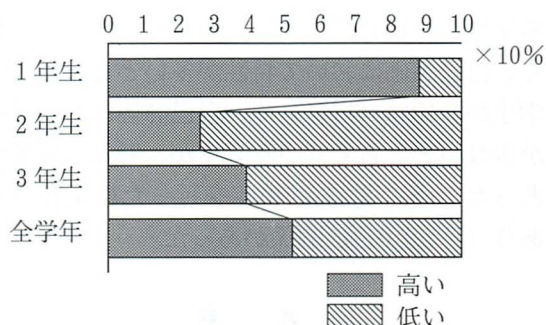


図2 当校看護学生の特性(自己評価)

年の平均は123.03、2学年114.71、3学年116.79であった。学生96名の内、自己受容の高い学生は、49% (47名) で自己受容の低い学生は51% (49名) であった。学年別にみると、自己受容の高い学生は、1学年では62% (21名)、2学年では38% (13名)、3学年では46% (13名) であった (図1)。

2. 当校教師の望む学生の特性について (学生の自己評価より)

学生96名の内、特性が多いと評価している学生は52% (50名)、特性が少ないと評価している学生は48% (46名) であった。学年別にみると、特性が多いと評価している1学年は、88% (30名)、2学年は26% (9名) 3学年は43% (11名) であった (図2)。

1学年と2学年及び1学年と3学年における特性が多い学生の割合の差の検定結果は、5%水準で有意差がみられた。2学年と3学年間に差はみられなかった。

3. 自己受容と学生の自己評価による特性について

自己受容と自己評価による特性の分布は表3のとおりである。自己受容が高く、自己評価において特性が多いととらえている学生が34% (33名) で、自己評価において特性が少ないととらえてい

表3 自己受容と自己評価による学生の特徴

学生の特徴 自己受容	多いと評価 (N=50)	少ないと評価 (N=46)
高い (N=47)	33 (34%)	14 (15%)
低い (N=49)	17 (18%)	32 (33%)

N=96 (単位: %)

る学生が、15% (14名) であった。自己受容が低く、自己評価において特徴が多いととらえている学生が、18% (17名) で、自己評価において特徴が少ないととらえている学生が、33% (32名) であった。両者間で χ^2 検定を行った結果有意差があり ($P<0.01$)、関係があった。

考 察

沢崎の作成したスケールで調査した一般女子大学生と当校学生の自己受容の比較をした結果、当校学生の自己受容の方が全体的に高かった。柏木は³⁾「自己受容については、一般的な発達傾向よりも、青年のおかれた社会的状況、経験がいかに関与するかを明らかにすることが重要である」と述べ、Morseら⁴⁾の研究では他者との間に起こった経験の内容や出会った他者の特性いかによって自己尊重が低下させられたり、逆に向上し安定したものになったりする事情を分析している。看護学生は、入学時点よりある程度自己の社会の中での役割を感じているうえに、臨床実習なども経験し、様々な人達との出会いや経験により、自己が確立していく機会となり、一般女子大学生よりも自己受容が高く表れているのではないかと推測する。

2、3学年において看護学生としての特徴が少ないと評価している学生が多いのは、学校内における教師との関わりや臨床実習における指導者との関わりの中で、自己の人間的未熟さを指摘されたり、自ら気付いたりすることにより、自分自身をみつめる機会が多くなり、自己を客観的に見つめ、自らを正しく認識しようとする姿勢と能力が養われてきている結果ではないかと考える。

自己受容の高い学生は、自分自身の特性も多い

ととらえており、自己受容の少ない学生は、自分自身の特性も少ないととらえている。岸田は⁵⁾「自己受容の特色の一つとして、自分を価値ある人間として知覚する。」と述べている。そこで教師として一人一人の学生と関わっていく中で、自己受容の低い学生に対しては、その学生の持つ特性を認め、誉めてやり、自己を価値ある存在と思わせるような関わりが必要であり、今後は自己受容を個々にとらえて指導にあたっていく必要があると考える。

ま と め

1. 当校看護学生の自己受容は一般女子大学生よりも高い。自己受容の高い学生が49% (47名)、自己受容の低い学生が51% (49名) であった。
2. 看護学生としての特徴が多いと自己評価している学生が52% (50名)、特徴が少ないと評価している学生が、48% (46名) であった。
3. 学生の自己受容と看護学生の特徴の自己評価は χ^2 検定の結果関係があった。

今後、経時的に自己受容の変化をみていくことが必要であり、学生個々の個性や能力に価値を見いだせる教育、そして、学生に自分自身の価値を気付かせられる教育をしていくことが必要である。

引用文献

- 1) 梶田叡一：自己意識の心理学，p97-106，東京大学出版会，1990
- 2) 佐藤みつ子，森千鶴，森下節子，小池妙子：看護態度を支える自己評価，看護展望 17，69-74，1992
- 3) 柏木恵子：子供の「自己」の発見，p97-99，東京学出版会，1983
- 4) Morse S Gergen KJ：Social comparison, self-consistency and the concept of self. J Pers Soc Psychol 16: 148-156, 1970
- 5) 岸田博：来談者中心カウンセリング私論，道徳書院，1990
- 6) 沢崎達夫：自己受容に関する研究 (1)，カウンセリング研究 26: 29-37，1993

7) 沢崎達夫：自己受容に関する研究 (2)，カウンセリング研究 27：47-52，1994

Survival Analysis of Breast Cancer Patients at Red Cross Hospital
 Y. Sasaki, M.D., Ph.D., and T. Sasaki, M.D., Ph.D.
 Department of Breast Cancer, Red Cross Hospital, Tokyo, Japan

目的：乳がん患者の生存率を予測するための要因を明らかにする。対象：1980年1月1日から1989年12月31日まで、Red Cross Hospitalで乳がん手術を受けた患者。方法：Kaplan-Meier生存分析を用いて、年齢、病期、手術法、リンパ管浸潤の有無、ホルモン受容体の有無、HER2/neuの発現の有無、および術後の治療法を解析した。結果：全生存率は5年生存率で約60%であった。年齢、病期、手術法、リンパ管浸潤の有無、ホルモン受容体の有無、HER2/neuの発現の有無、および術後の治療法は生存率に影響を及ぼした。結論：乳がん患者の生存率を予測するための要因を明らかにし、治療法の選択に役立つ。

